

大江健三郎・正村公宏・川島みどり・上田 敏

自立と共生を語る

障害者・高齢者と家族・社会

(A 5 判 205 頁 1,600 円 (税込) 1990 年 三輪書店刊)

小川 孟

(横浜市総合リハビリテーションセンター)

「今日は本当にいいお話をうかがいました」と、上田氏が大江氏との対談の最後でいっておられる。この本全体を読み終わっての感想がまさにそうである。私は話に聞き入り、時にうなづき、時に自分の思いをつぶやき、ふとかつてのクライアントやその家族に思いをはせるなどしながら、あたかもその場に陪席しているような錯覚さえ感じた。

この種のものにありがちな、“時間が限られているのか”とか、“紙面の都合で”といったあわただしき雰囲気がないのもいい。人間が負うには重すぎるとさえ思われるテーマが、ゆったりと、静かに話し合われていく。

大江：病院の受付で事務的に「お客さん、あなたは患者のお父さんですね。これは手術するほうですか、それとも自然に死なせるほうですか、どちらに提出しますか」

といわれたとしたら、僕は自然に死ぬほうに提出していたと思うのです。その子供を……それはいまでも僕の隠れた罪悪感の源をなしていますけれども。

正村：それなりに 24 時間付き合っていますから、施設の先生方とは違った目で、違った立場で、ある面ではむしろより長く、より深く子供を見ていて、それなりの意見もあります。自分たちの意見が常に正しいとは思いませんけども。そういうレベルで対話をしようと思った時に、対話が成立する専門の施設の職員が何人いるかと考えてみると、ちょっと淋しくなるのが現実です。

障害をもつ子供の父親としての作家大江健三郎氏と経済学者正村公宏氏が語る言葉は、そのまま障害をもつ多くの人々とその家族の声として聞こえてくる。看護学研究者の川島みどりさんも母を家庭

で介護した体験から、“専門的な知識も身内のこととなると……”といったエピソードを交えながら、高齢者の自立とケアについて語っている。

川島：とにかく ADL で評価しがちですね。障害の援助という時に、目に見える動きというか、効果が現れてこない、なかなかそれは効果が上がったというふうにはいいにくいので、非常にむずかしいと思うのですが、病院にいる看護婦の側からは、そういう精神的な自立度というのが、よく見えるし、大切に思えるのです。

この本は 3 つの対談をまとめたものである。話し手は上記 3 人の方々であるが、聞き手が尋常でないことは、話し手が“こんなに話すつもりではなかった”と悔んだのではないかと心配するほど率直に思いを述べておられることから分かるのである。近頃対談の名手と評する人もいる上田敏氏の聞き役が、この企画を成功に導いたといっても過言ではないであろう。参考資料の挿入も適切で、対談の理解を深めるのに役立っている。

この本の成り立ちについて、上田氏が書かれている“はじめに”から読まれることを特におすすめする。